

百地丹波城(百地砦)(伊賀市喰代字城谷)(史跡公園)(青雲寺・永保寺)

百地氏城跡(ももちしろあと)

百地氏は伊賀流の忍者、百地丹波守(たんばのかみ)が有名ですが、史実としてはほとんどわかっていません。しかし、天文十三年(一五四四)の史料に「喰代もも地殿」と見えることから、戦国時代には北伊賀地域の有力な土豪(どごう)として知られていたようです。

百地氏城跡に代表される土塁や堀で防御施設を設けた中世城館跡は、市内に二五〇ヶ所余りあります。その中でも喰代(ほおじろ)・蓮池(はすいけ)地区は、中世城館跡が数多く分布する地域で、周辺には安場氏(やすばし)館跡や奥氏(おくし)館跡・上山氏(うえやまし)館跡など十四ヶ所の中世城館跡が確認されています。

この城跡は丘陵の尾根を利用してつくられたもので、最も山寄りの郭(くるわ)から現在の青雲寺(せいいうんじ)まで含めると、長さ二五〇m、幅は最も広い所で六〇mで、市内でも有数の規模となります。城跡の構造は、尾根を削平(さくへい)してつくった郭を連ねたように配置したもので、四つの郭(左図郭A~D)が段々に形成されています。この中で郭Cは七〇×四〇mと最も大きく、四方に土塁を築いているほか、南側に自然地形を利用した堀、東側には堀切があります。また周囲に郭Cを防御するための郭(左下図、郭I~IV)を設けたり、進入路を屈曲させるなど防御の工夫を凝らしていることから、百地氏城跡の中心部分(主郭)と考えられます。

主郭を巡る土塁は北側・西側・東側の土塁の外側は崩れが著しく、工事により保護されていますが、内側はよく残り、当時の様子をうかがうことができます。南側の土塁は一部がなく、また他の土塁と比べて低いことから当時は塀(へい)があったのかもしれませんが。東側の土塁は主郭の中で最も高く、土塁の上が広がっていることから、かつては見張り台のようなものがあったと考えられます。また主郭内には幅一m余りの溝があります。これは、当時郭内を区画した痕跡と考えられます。

現地看板(上野市教育委員会)による

百地丹波

百地 丹波(ももち たんば、永正9年<1512年> - 天正9年<1581年?>)は、戦国時代の土豪。伊賀流忍術の祖とされる。百地 三太夫(ももち さんだゆう)とも呼ばれるが、近年では兩人は別人で、三太夫は丹波の孫ともいわれている。父は百地清右衛門。名は泰光とも正西ともあり曖昧。

経歴

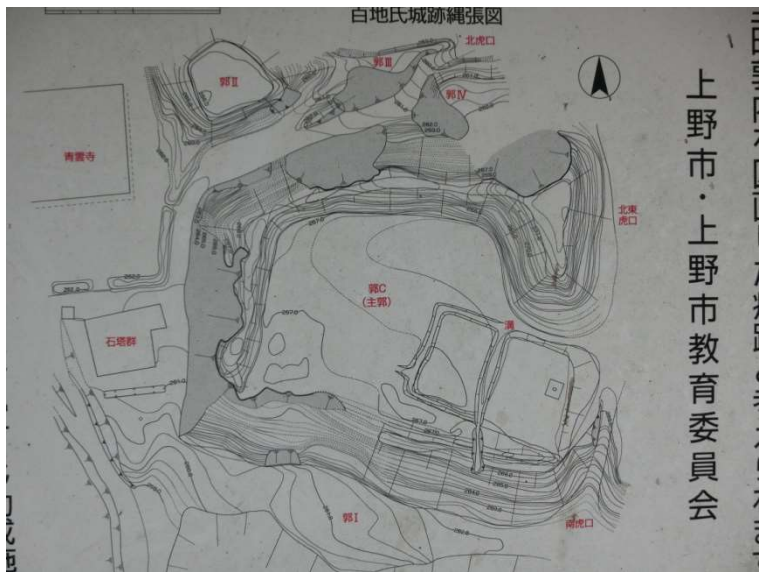
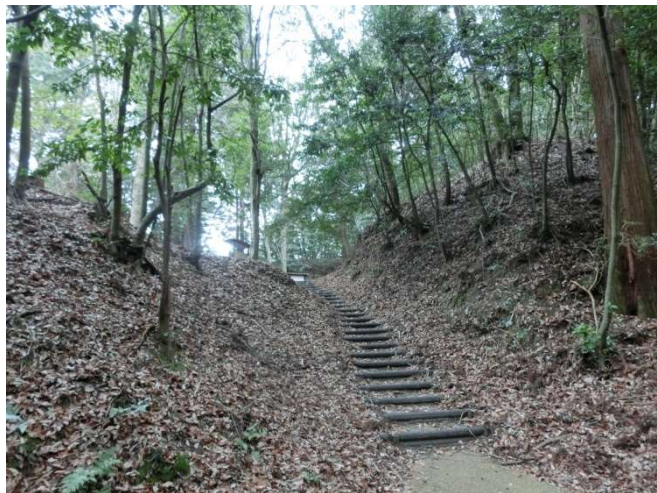
名張中村の出身で、表面上は伊賀一帯を仕切る土豪だったが、裏では伊賀流の忍者の上忍で、伊賀忍者を統括する3人組の一人であり、伊賀惣国一揆の指導者。天正年間には、伊賀南部にその勢力を広げて、最盛期を築き上げた。

織田信長の次男織田信雄が天正7年(1579年)に伊賀攻めを始めた。信雄の拙い指揮もあって織田軍を撃退したが、この忍者の実力に脅威を覚えた信長は、天正9年(1581年)に信長自ら5万の大軍を率い侵攻を開始する。これに対して丹波は、柏原の砦に籠もって抵抗したが、衆寡敵せず多くの一族と共に戦死した(天正伊賀の乱)。ただし、文禄4年(1595年)くらいまで存命していたという異説もある。なお、この乱の後、「ち」が血に通じることを嫌って、一族は「ももち」の読みを「ももじ」に改めたとされ、現在でも百地氏は「ももじ」と名乗っている。

石川五右衛門は丹波の弟子という説があるが、五右衛門に妻を奪われたうえ、その妻にそそのかされた五右衛門によって愛妾を殺害されるなど、散々な関係にあったといわれている。

国際的にも知名度が高く、国際スパイ博物館においても、スパイの祖としての忍者の代表的存在として扱われている。

現在も百地宗家は残っており、三重県名張市に居住している。現在の当主は百地喜生氏で19代目である。



上野市・上野市教育委員会



〒518-0811 三重県伊賀市喰代

